

と言う言葉を、いかに定義するかは、母校で教育に携わる教職員の人達に問われる大きな命題の一つだと思います。従来の感覚では、卒業後成人になって、或大きな組織の「トップ」に成る事が、一つの「核」になると言う定義の一つになっていったと思いますが、21世紀は、「起業する能力」を問われる時代とも言われます。エリートの定義が大きく変化する時代とも言われていいます。そして、特に、「強烈な独立心、責任感、知識欲、などが自己実現の為に、特に要求される個人能力になってきます。加えて、真摯な粘り強い、タフな精神、独創性が、個人々に非常に要求される時代が来る。」との予想を、シリコンバレーの中核機構のスタンフォード大学々々長（因みに、スタンフォード大学は私立大学です。）が話していました。又、この教授は、この様な資質を持つ人間達を教育、育成する事は、自ずとこれから（21世紀）の社会の中で今後必要とされる良いリーダー（人材）を育成することに繋がって行くだろうとも予想していました。この人間の資質は、先天的に備わっているモノでは無く、後天的にトレーニングされて備わって行くモノであるとも話していました。21世紀は、益々「教育」の重要性が問われながら、「大競争Ⅱメガコンペティション時代」に突入して行き、そこで勝敗が出てくる時代とも予測していました。続けて、一般の日本の表現として、教育の目的は、「良い人間」を作る事である。と言われますが、これは「初等Ⅱ中等教育」の目的であって、日本で良く言われる「協調性」だとか「人に対する

優しさ」などに付いては、この欧米人の教授の「初等教育」の頭脳の概念の中では、「教育」などと大上段に構えて言う思考は、全く無く、子供として普通に身に付けねばならない単なる「エチケット（観）」「レベルの話で語られてしまっていました。そして、「初等Ⅱ中等教育」と「高等教育」と、「教育」と語尾に付く言葉の主旨内容を、明確に峻別して話していたのが、大変印象的でした。「教育」と言う日本語で考える我々の概念と、「education」と言う英語で考える欧米人の概念が、何か根本的な解釈の所で微妙に違っている様に感じました。そしてヒョップとして我々日本人は、「education」と言う明治時代に入って来た外国語を、「教育」と言う日本語に翻訳した時に、日本で言う「しつけ」を、間違つて「教育」と言う言語解釈の中に入れてしまったのではないかと、フト思いました。そして又小生が、一番感じたのはこの話をしていた学長の話の内容が、非常に具体的で、常に現実的であり目的戦略がハッキリしていて明確な事です。それと比較して日本の教育者の話は、非常に概念的、観念的な話に終始するのと全く異っている事に気が付きました。又、アーナルホドと感じたのは、「education」と言う言葉について具体性、現実性を基礎に、思考を進めて行く事と、観念性、概念性を基礎に思考を進めて行く事では、何が違ってくるのかな？とも考えてみました。すると前者では、時代々により色々な多様性を持つ思考が物凄く要求される様に思われます。そして、そこに在るキーワー

ドは、この言葉の持つ「無限の可能性」が強調されると感じます。そしてそれを実行する為には、必然的に「獨創性」が必須条件になって来ます。後者では、どうしてもこの言葉の「普遍性」を追求する方向になつてしまうのではないかと考えました。そして結果として前者には、「多様性」と言う子供が生まれ、後者には、「均一性」と言う子供が生まれたのではないかと考えます。今の日本語（漢字）で言う「教育」は、或時代には成功したと思います。しかしこの「普遍性の探求」は、人類は、歴史上、面々と努力、思考してきた事です。が、しかし「普遍の真理」とやらはドウモ無いのではないかと薄々分かってきた様で、どうも「現在（今）」と言う「真実」しか無いと、哲学者達も、大体結論付けたのではないのでしょうか。そして、この永遠の命題、「普遍性の探求」の解答作りに熱心になるが余り、「現実」と言う事実に対応が必要になった時の、「獨立心」や「責任感」と言われる、必携道具の名前だけを知つていて、本当の使用方法が分からない人間、又は実行行動が出来ない（しない）人間が、この世界にも知らぬ間に増えているのかも知れません。それに加えて戦後に「イデオロギー」と言う、「麻薬（最強の習慣性鎮痛薬品）」と類似のモノが、多分この世界にも混入してしまつていて、と思ひますので、この大切な道具の影が益々薄くなつてしまつて機能不全を起こしてしまつたのを、我々は、今、「教育の危機」と叫んでいるのかもしれない。そして今迄「同窓会」と我々が呼称して来た組織も、このパ

ラドックスの中で暗黙の内に影響を受けている、かもしれない。前述した「初等Ⅱ中等教育」機関の一部としての感覚で母校を捉えた同窓会と、「高等教育」機関の一部としての感覚で捉えた同窓会とは自ずと同窓会のスタンスが変化して来ると思ひます。前者では、単なる「仲良しクラブ」に成るでしょう。後者では母校を、より上質な教育機関にする為に動く（働く）事、その事がどの様な果実を生み、我々同窓生にどの様な形で益となつて帰つて来るのか？、それを生み出す為には何をしなければいけないのか？、何が必要なのか？等、その意味を全員が理解した上で、高度で綿密な戦略を、計画、駆使し、資金投入したりと、割りと「煩わしい組織」になるでしょう。どちらを私学同窓生の我々が選択するのか？が我々に突き付けられた課題と小生は解釈します。日本では大体前者タイプが多い様に思うのは、小生だけでしょうか？又、「仲良しからビジネスへ」の構図が、良く話に出ますが、これは大切な事ですが、本来の同窓会と言う組織の本当の目的では無く、後者において成功した共同体が、当然な結果として甘受できる美味しい果実の一部として、「仲良しからビジネスへ」があると考えの方が正しい解釈と思ひます。これを第一の目標に置いていた間は、絶対に、この美味しい果実は食べる事は難しいし、パワーは出ないし結束固い同窓会組織は作れないのではないかと、この学長の話聞いていて思ひました。

欧米の同窓会組織は、母校に非常に強い発言力を持つていると聞きます。それは